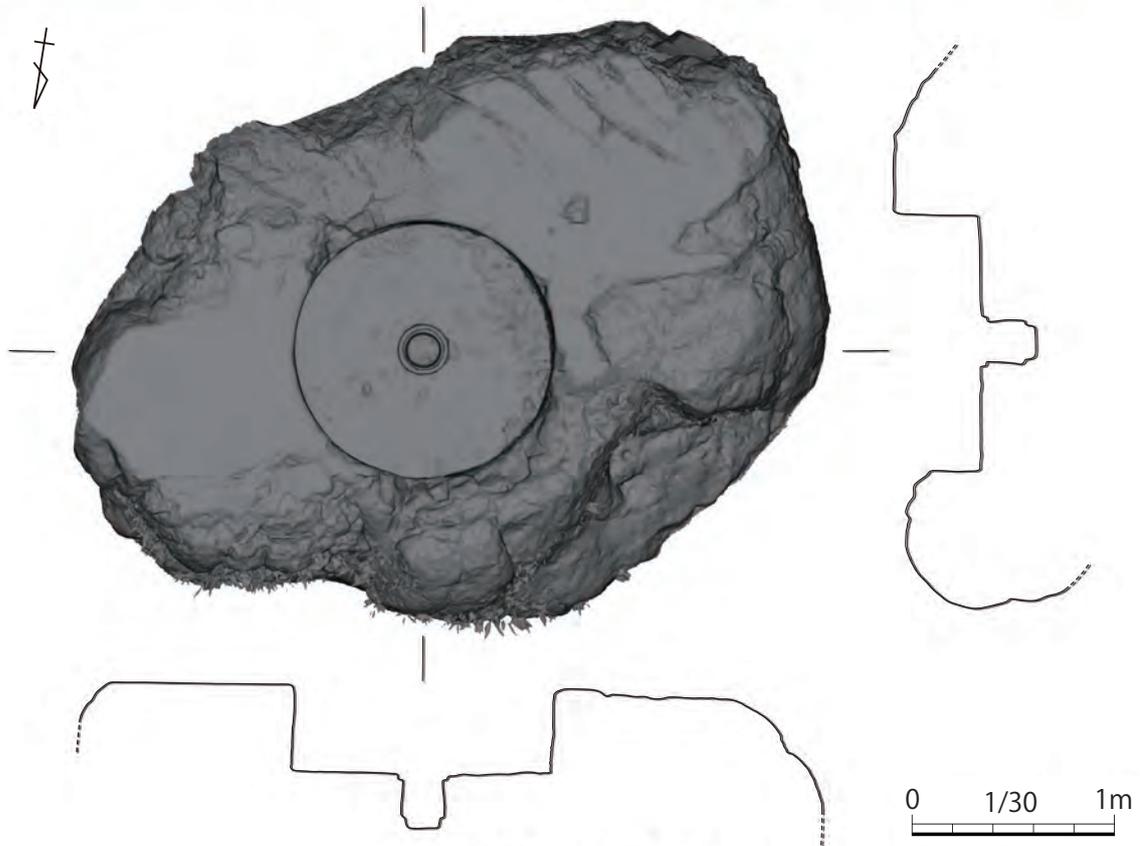




口絵4-1 河内飛鳥寺塔心礎 現況写真（北から）



口絵4-2 河内飛鳥寺塔心礎 実測図



口絵 5-1 建中寺燈籠 3Dモデル展開図・刻銘拡大図

※拡大図は 1/8



口絵 5-2 春日燈籠 火袋部 3Dモデル展開図

〈資料紹介〉御深井丸茶席庭園の石造物

大村 陸

キーワード

御深井丸 塔心礎 古代寺院 弓矢櫓 礎石
石燈籠 織部燈籠 春日燈籠 方角石 井戸筒

はじめに

名古屋城の御深井丸では多種多様な石造物を見ることができる。これらの多くは昭和 24 年（1949）に行われた茶席の整備に伴って名古屋城へ持ち込まれたものである。茶席は天守再建に先立って市制 60 周年記念事業のひとつとして整備され、建築を森川勘一郎が、庭園を子息の森川勇が担当した。庭園に置かれた石造物に注目すると由来が不明瞭なものも多いが、どれも優品で、その収集に携わった両氏の功績は大きい。

茶席の整備から 70 年以上が経ち、現在は年数回の特別公開を除き非公開⁽¹⁾となっているが、本稿にて茶席庭園に置かれている石造物と、合わせて茶席内で現存する弓矢櫓の礎石を報告する。

1 茶席庭園の石造物の概要

現在の茶席庭園で見られる石造物は 16 点あり、記録はあるが所在不明となっている 2 点、そのほか隅櫓の礎石 2 箇所を合わせた 20 資料を今回の報告で取り扱う。

各資料の現在の位置を示したものが図 2 で、礎石類、石燈籠類、その他の石造物と 3 つに分類し、次章より順に報告していく。

2 礎石類

A1 河内飛鳥出土塔心礎（巻頭口絵 4）



図 1 現在の茶席庭園（織部堂を東から望む）

河内飛鳥出土塔心礎は大阪府羽曳野市飛鳥周辺で出土し、昭和 32 年（1957）に名古屋城へ寄贈されたものである。御深井丸の石造物のなかでもひと際目立つ巨大な心礎で、城内の石造物では団原古墳石室⁽²⁾に次いで研究史上で多く取り上げられている重要資料といえる。

心礎の寸法は長さ 3.0m で直交方向の幅 2.1m、露出部の最大高は 0.6m である。上面の中心から少し東寄り（現在の位置による方位、以降も同様）に 4 段の孔が開けられており、類例が多くある 3 段式の心礎と比べて底部がさらに 1 段つく。各孔の計測値は、1 段目の心柱孔が直径 103cm で深さが 34cm、2 段目の蓋受孔が直径 20cm で深さが 2 cm、3 段目の舍利孔が直径 16cm で深さが 15cm、4 段目の乾湿孔が直径 14cm で深さが 4 cm である。

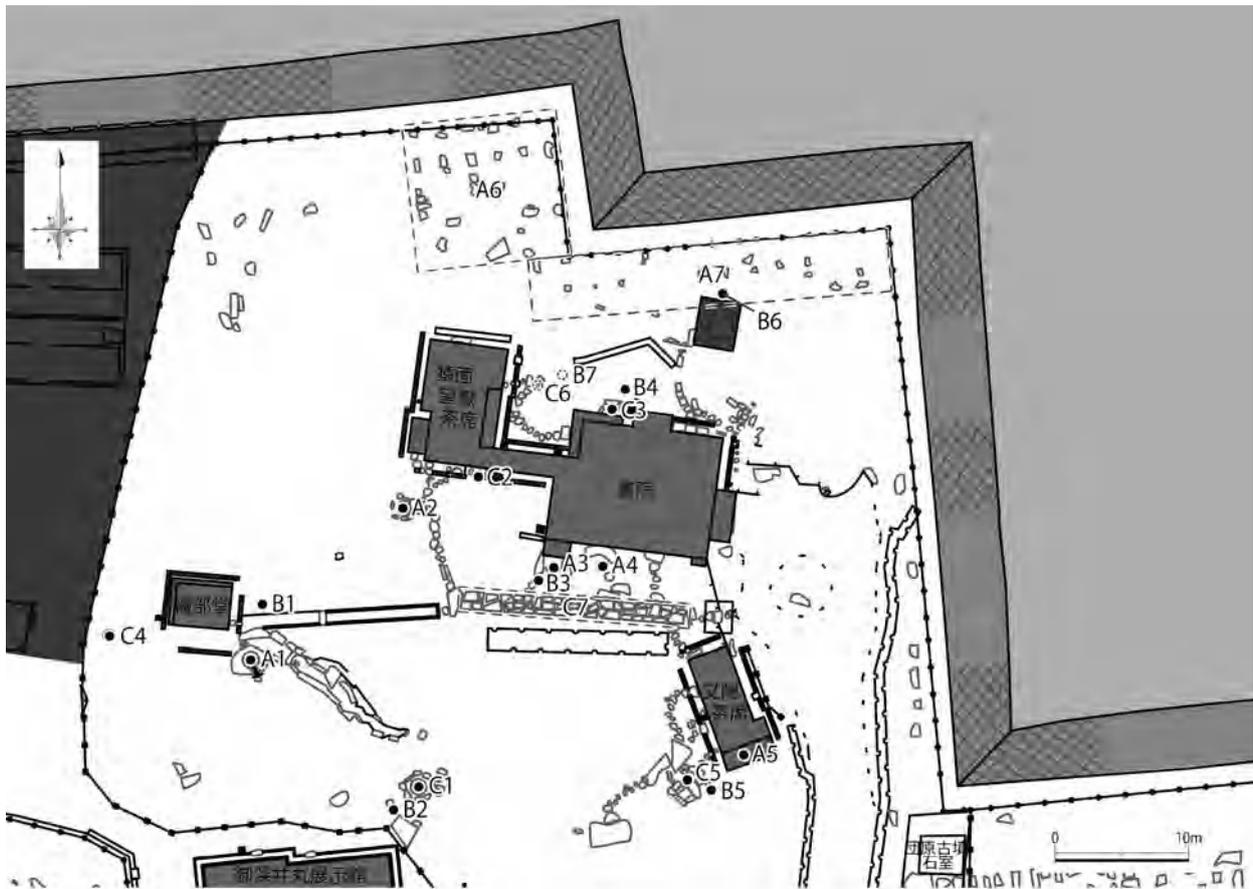
心礎の出土から寄贈までの経緯は大谷俊雄と山本彰によって既に報告されている。大谷は関係者への聞き取り調査による成果を（大谷 1982）、山本は新聞記事と発見直後の大阪府教育委員会による記録などを紹介している（山本

2007)。それらの成果をもとに本稿でも発見から寄贈までの経緯を簡単に整理しておく。

心礎の発見は昭和9年(1934)の春で、個人所有のため池を水抜きした際に北東側の池畔から見つかったようである。発見後に大阪府職員が調査をしており、12月には日本古文化研究所の足立康が心礎を評価した新聞記事が報じられた。この時には名古屋出身で石造美術に造詣が深かった高松静男によってすでに購入され

ており、鉄道で名古屋へ運ぶまでに大阪府などによる一時引き止めがあったが、交渉の結果認可され、年内に名古屋駅まで輸送された。そこから栄の高松宅までは陸軍造兵廠の機械で運ばれたという。心礎の購入額が当時のお金で7～80円だった一方で、運送には500円かかったと記録されている。

高松宅の庭に置かれた心礎であったが、その後戦禍に巻き込まれ、敷地が戦後の都市計



1. 礎石類	2. 石燈籠類	3. その他の石造物
A1 河内飛鳥出土塔心礎	B1 織部燈籠	C1 方角石
A2 法華寺礎石	B2 建中寺燈籠	C2 紙屋川橋杭
A3 橘寺礎石	B3 春日燈籠	C3 車手水鉢
A4 不明礎石1	B4 四方燈籠	C4 くりぬき井筒
A5 不明礎石2	B5 西ノ屋燈籠	C5 手水鉢1
A6 弓矢櫓礎石	B6 不明燈籠1	C6 手水鉢2 (所在不明)
A7 東弓矢多門櫓礎石	B7 不明燈籠2 (所在不明)	

図2 茶席庭園内石造物位置図

画で換地として移転されるのを機に名古屋城へ寄贈されることとなった。寄贈に際しては当時の小林橋川市長が事前に視察へ訪れた様子が報じられ、昭和32年（1957）11月にトラクターで御深井丸茶席庭園の現在と同じ場所まで搬入されたようである。

以上が経緯になるが、河内飛鳥出土塔心礎が心礎の研究史上で取り上げられたのは田中重久が初出である（田中1939）。田中は心礎の集成と分類を行っており、そのなかで新たに提示した「凹四段式心礎」の代表として紹介している。高松宅に所在していた頃の実測図も掲載され、底部の4段目が舍利孔の湿気を除くためのものと指摘している。

石田茂作による集成と分類（石田1932）や田中の成果からさらに集成を拡充したのが岩井隆次である（岩井1982）。岩井は河内飛鳥出土塔心礎を3段孔式の派生として「檜前寺式」に分類し、全342事例の集成から心礎の大きさと心柱孔の大きさが国内有数であることを示している。

昭和60年（1985）には伊藤厚史が実測図の作成から河内飛鳥出土塔心礎の紹介をしており（伊藤1989）⁽³⁾、羽曳野市野中寺の発掘調査報告書では出土した心礎の類例として取り上げられ、新たな実測図と寺山周辺の黒雲母石英安山岩製であることが報告されている（羽曳野市教育委員会1986）。

このほか藤沢一夫は河内飛鳥周辺で白鳳期の平瓦や丸瓦が採集できるとし、飛鳥戸郡の郡寺として白鳳期の古い時期から「飛鳥寺」があったと評価している（古代を考える会1976）⁽⁴⁾。

昭和60年（1985）には付近一帯で埋蔵文化財の分布調査が行われ（羽曳野市教育委員会1986）、その後平成元・2年（1989・1990）には駒ヶ谷遺跡調査会によって心礎出土地周辺の試掘調査が実施された（羽曳野市教育委員会1992）。26箇所の地点で調査を行い、平安時代後半以降の瓦や寺院遺構等が見つかった一

方で古代寺院に関わる遺構・遺物は一切確認されなかった。この時に再度心礎の実測図が作成されている。また、平成6年（1994）に羽曳野市史の第3巻が刊行され、辻葩学によってこれらの成果が簡潔にまとめられている（辻葩1994）。

羽曳野市史では「河内飛鳥寺跡」という名称を使用しているが、その由来は特定の寺院ではなく周辺の「飛鳥」という地名によるものである。出土地周辺には「西ノ寺」「龍王寺」といった寺院に関連する小字が残されており、発見時から西ノ寺や龍王寺、飛鳥廃寺などでも呼称されてきた。そのほか『太子伝玉林抄』に太子建立四十六寺院のひとつとして「飛鳥寺」の記述があり、そこに結び付ける説も提示されている（大谷1982や岩井1982）。

玉林抄に注目すると実際の実測図は「飛鳥寺、推古天皇御願、云々。今者堂塔本尊無之。」とある（『太子伝玉林抄』巻第二十）。太子建立として52の寺院が一連に記されているが、そのうち所在国が書かれていないのは繖寺、當麻寺、久米寺、飛鳥寺の4つのみである。これらの寺院だけ記載がない理由は不明だが、他の古文献を見ればおよそその所在は推定できる。しかし、飛鳥寺だけは和と河内どちらの飛鳥を指すのか断定することができない。このため、先の説が提唱されていると考えられる。

少し検討してみると、和の飛鳥寺は『上宮太子拾遺記』にて建久7年（1196）に寺院が全焼して本尊の頭部と手だけが残ったことが記録されており、玉林抄が書かれた室町時代にはほぼ記述通りの姿であった可能性がある。一方の河内飛鳥についても発掘調査の成果から当時は寺院が存在しなかった可能性が考えられる。しかし、河内飛鳥出土塔心礎が白鳳期のものと考えられることから（後述）、玉林抄の飛鳥寺は6世紀末に建立されたとされる和の飛鳥寺を指すと思われる⁽⁵⁾。

これまでいくつかの実測図が作成されてき

た河内飛鳥出土塔心礎だが、本稿では3次元計測によって改めて実測図を作成した⁽⁶⁾(巻頭口絵4)。目的は主に2つあり、正確な図面を迅速に作成することと、石材加工技術の検討を行うためである。

心礎の加工技術を観察すると、まず上面については、大部分で平滑にすることを意図した加工が施されており、さらに加工痕を磨いて消すナラシ技法⁽⁷⁾が用いられている。心柱孔の北側一部分だけ粗く剥離していて、風化か後世の影響を受けていると考えられる。また、南西部に4本の溝が確認できるが、これは加工前にひだ状になっていた部分を平滑にした際に残った自然面と思われる。

心礎の側面から下半にかけては大半が自然面のままである。ただし、南西部においては粗削りの加工が確認でき、全体の形状をおおまかに整えるような加工があったことがわかる。

心柱孔は真円に彫り込まれており、底面は水平になるよう整えられている。全面がノミ小叩き技法によって加工され、心礎として使用する際に全て隠れる部分であっても仕上げまで丁寧に施されていることが分かる。続く蓋受孔も真円で作られており、蓋をはめ込み密閉する必要があったためかナラシ技法で表面と角部が整えられている。

舍利孔にはノミ小叩き技法が用いられており、断面を確認すると中央部から下部にかけて少し膨らんでいることがわかる。これは工具に起因するものと考えられ、細長いノミ状の工具を用いて孔を彫る際に工具の長さが十分でなく垂直に彫れなかったものと想定できる。また、最深部の乾湿孔もノミ小叩き技法で東側がやや深く彫られており、工具の影響で他の部分のような丁寧な加工が出来なかったと考えられる。

河内飛鳥出土塔心礎に見られる加工技術を部位ごとに観察したが、全体としては精緻な

加工が各所に施されているといえる。古墳時代後期の家形石棺では、使用時に隠れてしまう棺内や棺身外面底部が粗い加工のままのものや、水平垂直がゆがんでいるものも多く見られる。これと比較すると心礎では硬質な石英安山岩を真円や水平を意識して加工できる精度の高い技術が用いられていることがわかる。河内飛鳥周辺では、古墳時代終末期から心礎と同じ寺山産の石英安山岩を用いた横口式石槨を観音塚古墳やオーコー8号墳などで見ることができ、切石を精緻に加工し組み合わせている。連続する時期のなかで心礎の加工技術とは強い関連が考えられ、古墳時代終末期から製作物を変えながら寺山に拠点をもった石材加工集団が存在した可能性がある⁽⁸⁾。

河内飛鳥出土塔心礎の時期について、発見当初から足立康によって白鳳期の心礎とされ、岩井隆次も白鳳期としている。発掘調査から遺物が確認されていないため詳細な検討はできないが、形状が類似する3段孔式の心礎は白鳳期に多く見られることは指摘できる。4段の孔をもつ心礎は、ほかに葛城市石光寺と堺市丹比庵寺に限られ、どちらも白鳳期の軒丸瓦が見られる。また、同じ寺山産石英安山岩製の羽曳野市西琳寺の心礎も注目できる。3m×3mで高さ1.5mの巨大な心礎で飛鳥後期から白鳳期にかけての軒丸瓦が見つまっている。これらの類例からみても河内飛鳥出土塔心礎は白鳳期の心礎である可能性が高い。

最後に心礎出土地周辺に寺院が存在したのかについて私感を述べて終わりにしたい。駒ヶ谷遺跡調査会による調査の報告書では、心礎出土地周辺で遺構や遺物が確認されなかったことの要因として、A: 後世の地形改変によって寺院に関する遺構・遺物が消滅した、B: 平安後期の寺院創建に際して別の場所から持ち運ばれた、C: 別の場所にあった塔心礎が遺棄された、という3つの可能性を提示している(羽曳野市教育委員会1992)。また、山本は寺院

建立に際して塔心礎を設置したが、建設中止となり塔心礎だけ残された説を提示している（山本 2007）。

周辺の古代寺院の分布をみると、石川の沖積平野では密な分布がある一方で、古代の官道である竹内街道に沿って出土地周辺の丘陵に上がると途端に分布が少なくなる。渡来系氏族の飛鳥戸氏の本貫であるこの地域に寺院が存在しないとは少々考えにくい。心礎は寺山から採石されたことから近辺の寺院に用いられた可能性が高く、精緻な加工をみると未成品とも考えにくい。また、心礎がため池の北東堤から発見されたことに注目すると北東堤は谷部の低地側にあたり、ため池をつくった際に土留めを施した箇所と考えられる。これらことから、近辺にあった古代寺院の心礎がため池を作るなかで持ち込まれ、それが水抜きした際に発見されたのではないだろうか。

A2 法華寺礎石（図3-1）

茶席庭園の石造物のうち、寄贈の経緯が分

かっているもの、調査が行われているものは河内飛鳥出土塔心礎のみでそのほかは基本的に詳細不明である。こうしたなか唯一参考となるのが、名古屋城管理事務所が発行している「名古屋城内茶席乃由来」という小冊子である（発行年不明）。巻末に「森川勇氏の原稿を故森川勘一郎翁が後閲された小冊子を原にして、平易に修正し一部増補した」とあり、作庭した森川勇による各所の解説が記されている。以降の石造物は森川による評価を参考にしながら報告していく。

法華寺礎石⁽⁹⁾は森川によれば奈良市法華寺の礎石とされているもので、昭和24年（1949）の庭園整備に伴って持ち込まれたものと考えられる。

礎石は花崗岩製で、寸法は長さが100cm、直交方向の幅が83cm、下部は地中に埋まるが露出部の高さは20cmである。上面中央に円形の柱座が造り出しで設けられている。1段目は直径78cmで高さ10cm、その上にうっすらと2

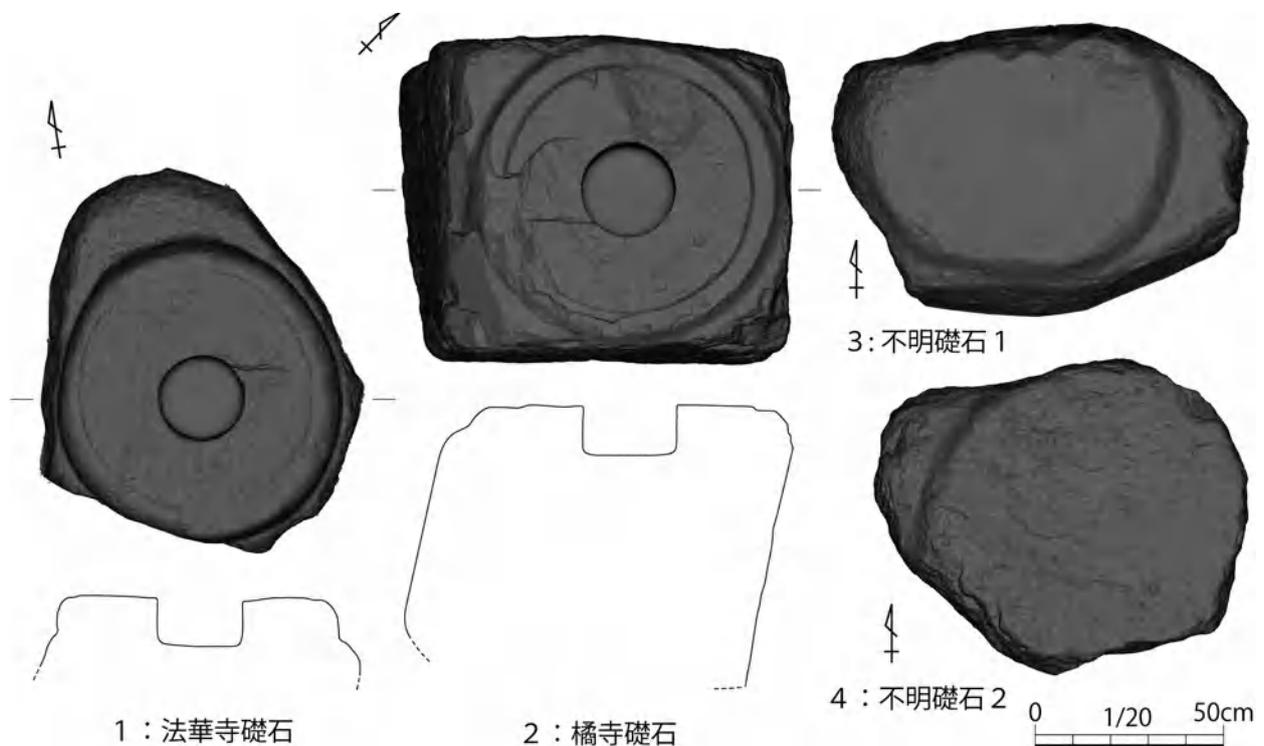


図3 礎石類実測図

段目があり、直径60cmで高さ3mmほどである。2段目は円形ではなく、双方中円形となっている。柱座の中心には直径23cm深さ12cmの円形の穴が掘り込まれているが、これは手水鉢として使用するために後世に加工されたものと思われる。

法華寺は奈良時代に総国分尼寺として建立された寺院で、境内の本堂西方で旧金堂の礎石を見ることができる。この礎石がいつの時期のものかは不明であるが、柱座は2段目の高さが5cmほどあるような明瞭な2段となっており、庭園の資料とは形状が異なる。

A3 橘寺礎石（図3-2）

橘寺礎石は森川が明日香村橘寺の礎石としているもので、昭和24年（1949）の庭園整備に伴って持ち込まれたと考えられる。現在も手水鉢として笕で水を満たしており、水みちとなっている上面北西部は浸食の影響を受けている。

礎石は花崗岩製で、寸法は長さが92cmで直交方向の幅が82cm、高さは76cmである。全体の形状は直方体状に整えられており、上面には円形でなだらかな2段の柱座が造り出されている。外側の1段目は直径79cmで高さ4cm、内側の2段目は直径66cmで高さ1.5cmである。柱座の中央は直径25cm、深さ13cmの円形の穴が掘り込まれており、手水鉢として使用するために後世に加工されたものと思われる。

法華寺礎石とは設置方法が異なり、台石の上に据えられている。台石は佐久石製で、森川によれば「旧徳川邸より運んできた」とされる。整備の背景から旧徳川邸とは市内の徳川邸を指すと考えられ⁽¹⁰⁾、大曾根邸と奥山町邸が挙げられるが、時期と庭石という観点からみると大曾根邸の可能性もある。

橘寺は聖徳太子誕生の地として知られており、境内の往生院中庭には2点の古い礎石が置かれている。どちらも2段の柱座をもつが、1段目は方形で2段目は高さのある円形のも

ので、庭園の資料とは形状が異なる。全体の形状も自然石のままとなっており、庭園の資料が後世に方形に整えられた可能性もあるが、形状が異なっている。

A4 不明礎石1（図3-3）

不明礎石1は森川によれば名古屋城内に放置されていた石垣の残石から発見された古い伽藍石とされている。

礎石は花崗岩製で、寸法は長さが97cmで直交方向の幅が77cm、下部が地中に埋まるが露出部の高さは18cmである。上面中央には1段で円形の柱座が設けられ、直径88cmで高さ3cmである。柱座は南側15cmほどが割り取られている。この大きな柱座があることから古代寺院の礎石である可能性が考えられるが、詳細は不明である。

A5 不明礎石2（図3-4）

不明礎石2は森川によれば名古屋城旧清水御門の石垣の中から出てきた古い伽藍石とされている。

礎石は花崗岩製で、寸法は長さが108cmで直交方向の幅が68cm、下部が地中に埋まるが露出部の高さは19cmである。上面中央には1段で円形の柱座が設けられ、直径84cmで高さ3cmである。柱座は北側25cmほどが欠損している。不明礎石1と同様に、大きな柱座があることにより古代寺院の礎石である可能性が考えられる⁽¹¹⁾。

A6 弓矢櫓礎石（図4、図版1）

弓矢櫓礎石は茶席庭園内で確認することができる隅櫓跡に現存する礎石である。

弓矢櫓は二重の隅櫓で、北面に水堀から直接水を汲むことができる水汲窓が設けられていた。『金城温古録』によれば弓道具の保管庫で、弓矢奉行役所として使われたとされる。その後、明治6年（1873）頃に陸軍によって壊されたと考えられている。

弓矢櫓周辺の礎石が現存することは知られていなかったため基礎的な調査を実施した。図

4に示したのが現在の地表面で観察できる礎石の位置とその石種である。礎石は地表面より上の部分を輪郭とした。当然地表下で残存するものもあると想定されるが、茶室整備時など後世の影響を受けてか礎石の配置は一部失われている。

桁行（東西）方向の北から2・3列については残存状況が良く、一定間隔で並ぶ礎石が確認できる。他の箇所も部分的に確認することができ、全体で5間6間の礎石が残存していることがわかる。これらのことから、弓矢櫓は北端と東端の礎石に石垣天端石を使用して建てられた南北5間東西7間の隅櫓であったと考えられる。また、柱間は6尺5寸（約1.97m）と推定される。『金城温古録』では大きさについて明確な記載はなく、外観の計測値として南北6間1尺、東西7間3尺と記されるのみである。絵図をみると、「元禄十年御城絵図」や「御本丸御深井丸図」では南北5間東西7間で柱配置が描かれており、こちらが参考となる。

石種は砂岩や花崗岩、花崗閃緑岩が確認でき、

石垣石材と同様の石材を割石に加工し、礎石として用いていると考えられる。弓矢櫓には修理等の記録は残されておらず、築城期の礎石が現存する貴重な資料として評価できる。

A7 東弓矢多門櫓礎石（図4、図版2）

東弓矢多門櫓礎石は弓矢櫓と接続する多門櫓跡に現存する礎石である。弓矢櫓と同様の調査を実施して図4に成果を示した。

『金城温古録』には「古図によると3間梁14間と有り」という記載と1重に描かれた立面図が記されているのみで、詳細は不明である。弓矢櫓から少し西に離れた御深井丸北辺中央には西弓矢多門櫓があり、弓矢方の所有とされているので、名称からして東弓矢多門も同様のものと考えられる。また、これらの建物は徳川慶勝が撮影した連続写真から江戸時代後期頃の外観を伺うことができる。こちらも弓矢櫓と同じく明治6年（1873）頃に陸軍によって壊されたと考えられる。

残存状況を見ると、北から3列目がおおよそ等間隔に並ぶが、欠損が著しく、西から6

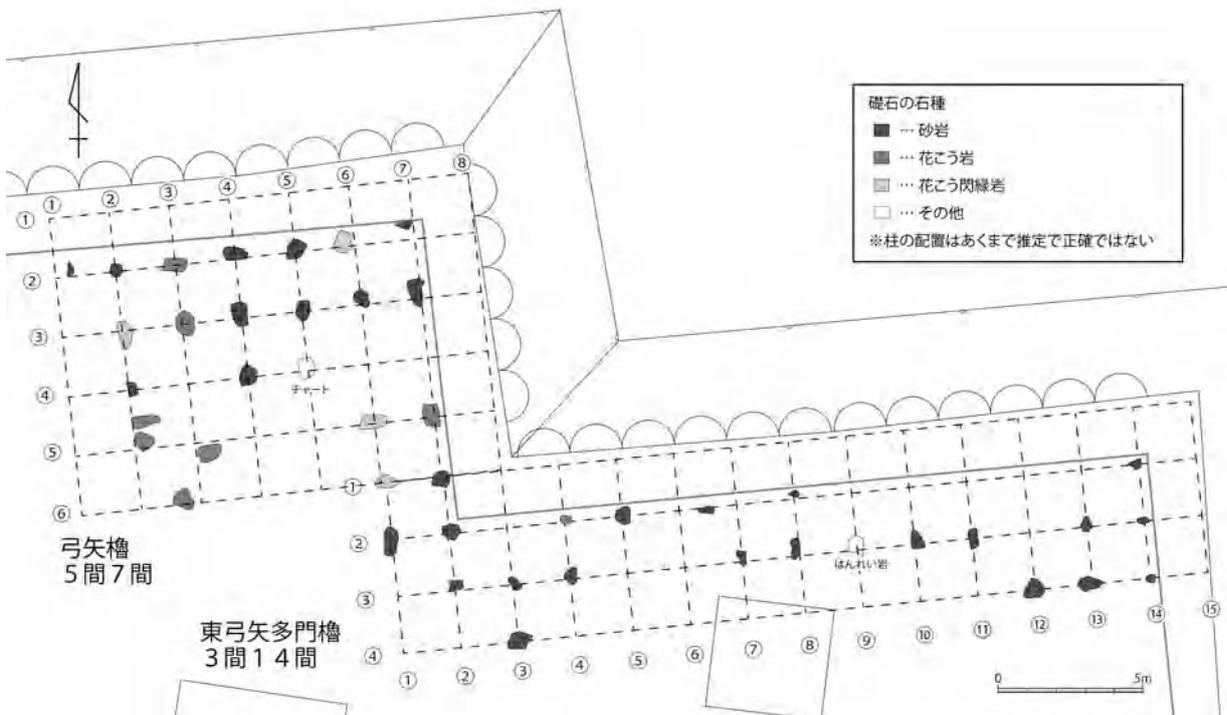


図4 弓矢櫓・東弓矢多門櫓跡 礎石残存状況

列目の礎石については木の影響で東へずれている状況が確認できる。これを除けば全体で一定間隔に並ぶ礎石がみられることから、東弓矢多門櫓は南北3間東西14間の多門櫓であったと考えられる。

石種については弓矢櫓と近似している。なお、北から4列目中央では、礎石の位置と被るように倉庫が建てられており、茶席整備の際に大きく壊されている可能性がある。

3 石燈籠類

B1 織部燈籠 (図5-1)

織部燈籠は織部堂東方に置かれており、昭和24年(1949)の茶席整備に伴って名古屋城へ持ち込まれたものである。

森川によれば熱田羽城の加藤家で代々大切にされていたもので、戦時中には土中深くに埋めて保存していたほどであったという。猿面茶席が現存していた頃には前庭に織部燈籠が置かれていたことから、それを模すために加藤家より寄贈を受けたとされる。

基礎以下が地中に埋まる生込型の花崗岩製織部形石燈籠⁽¹²⁾、露出部の全高が158cm、最大幅となる笠が幅48cm奥行48cmである。火袋は東西面が火口として開口し、北面は円窓、南面は三日月窓となっている。竿は上部が低いものの十字形となっており、裾の長いカトリック神父と思われる立像が刻されている。竿に記号等は彫られていない⁽¹³⁾。

『名古屋の石造物』(名古屋市教育委員会1983)にて市内の織部燈籠が調査されており、この織部燈籠も取り上げられている。

B2 建中寺燈籠 (図5-2、巻頭口絵5)

建中寺燈籠は森川によれば徳川光友の「墓所にあったものを記念のために譲り受けた」とされる。

六角型の花崗岩製石燈籠で、基礎蓮弁から露出する全高が215cm、笠が幅95cm奥行95cmである。笠は蕨手が1箇所欠損している。火袋

は6面のうち3面が円窓として開口し、他の西面及び北東面には法輪が、南東面に格子窓が陰刻で彫られている。中台の側面は正面の3面のみ装飾があり、背面3面は無地である。竿は中節中央の隆起帯が発達した形状をもち、銘が刻まれている。東面上段に左から「瑞龍院殿御廟所 / 奉寄進石燈籠 / 従五位下但馬守」、東面下段に「両柱 / 源朝臣友親敬立」、西面上段に「元禄十三庚辰年十月十一日」とある。

瑞龍院は徳川光友の戒名で、紀年銘は光友の命日である。寄進者の源朝臣友親は、光友の十一男で川田窪松平家初代当主となる松平友著の初名である。また、両柱とあることから本来は2本1対であったと考えられる。

また、名古屋城振興協会事務所の南方には平成31年(2019)に青山智子から寄贈された燈籠の部材が複数置かれているが、この中に徳川綱誠の墓銘、徳川宗睦の墓銘が刻まれた石燈籠がある。徳川宗睦の墓碑は昭和28年(1953)に建中寺から小牧山へ移設されており、その際に個人へ払い下げられたものと思われる。現在小牧山で見られる石燈籠と同形である。光友墓所も同時期に改変されたと思われるが、名古屋城への寄贈者や寄贈時期は不明である。

B3 春日燈籠 (図5-3、巻頭口絵5)

春日燈籠は六角型の花崗岩製石燈籠で、基礎蓮弁から露出する全高が190cm、笠が幅75cmで奥行は欠損しているが64cmである。笠は蕨手が3箇所欠損する。欠損部の2箇所には小孔が穿かれているため、欠損後に新補石材をはめ込んで補修していた可能性がある。

火袋は南面中区に鹿が陽刻で彫られ、その上部には円窓が開口する。森川によれば春日鹿曼荼羅を描いたものとされる。北面は方形の火口となっており、残りの4面には四天王の姿が1体ずつ陽刻で彫られる。北東面が增長天、南東面が広目天、南西面が多聞天、北西面が持国天である。なお、火袋には接合痕があり、上下2つに割れたものを接合した痕跡を確認

することができる。

森川は「鎌倉時代末期を降らないものであろう」とし、「他に類例をみない希少なもの」で「春日燈籠の濫觴ともいえる」と評価している。

B4 四方燈籠（図版3）

四方燈籠は基礎以下が地中に埋まる生込型の花崗岩製石燈籠で、露出部の全高は147cm、笠が幅45cm、奥行44cmである。現況東に傾いている。

火袋は南面が方形の火口で、北面には円窓と下部に獅子が陽刻で彫られている。注目されるのが東西面で、東面に観音菩薩、西面に地藏菩薩が陽刻で彫られている。この組み合わせの一方で菩薩像の周囲には装飾が一切なく、素朴な印象も受ける。竿は四角形の上部をもつが、全

体の形状は中央部が細い円柱状である。

森川によれば「奈良法華寺型を模造したもの」とされており、たしかに文京区護国寺の石燈籠群にある「法華寺型」の石燈籠に形状が類似する。

B5 西ノ屋燈籠（図5-4、図版4）

西ノ屋燈籠は森川によれば、寄せ燈籠であるが南北朝時代のものでされている。四角型の花崗岩製で、基礎蓮弁から露出する全高は164cmで笠の幅56cm奥行58cmである。方形の笠は1箇所の隅が欠損している。火袋は北面が方形の火口をもち、東面は外区に開いた窓の装飾とその中央に雲と満月であろうか円窓が開く。西面も開いた窓の装飾に半月窓が彫られ、南面は窓枠越しの半月が陰刻で彫られている。

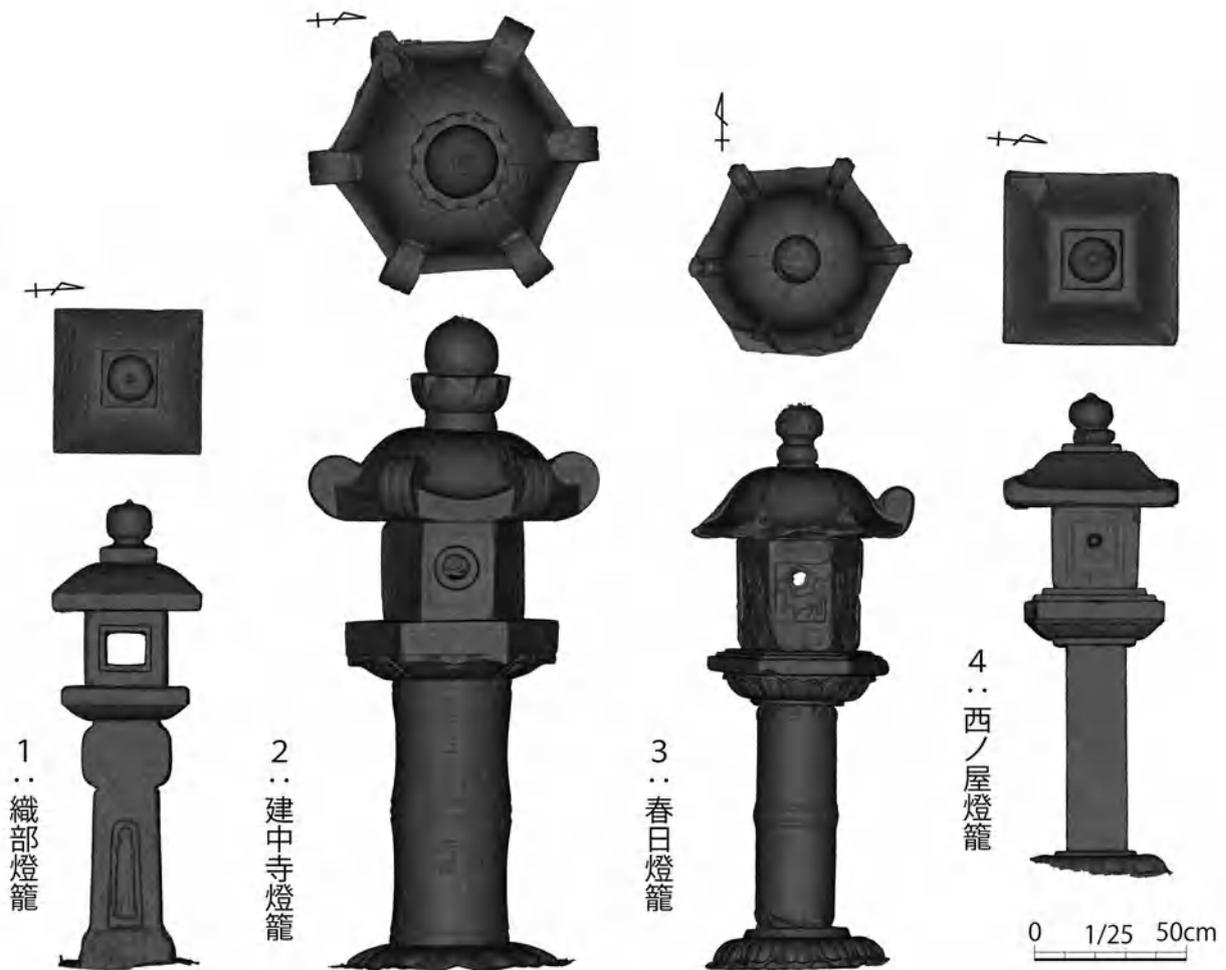


図5 石燈籠類実測図

森川によれば、明治初期頃に又隠茶席を山内邸に移築する際に両替町久田家の久田栄甫が前庭に置いた燈籠とされる。

B6 不明燈籠 1 (図版 5)

不明燈籠 1 は倉庫の北側に部材の状態で置かれている。笠と中台、竿の計 3 点が確認できる。このほか西之丸の名古屋城振興協会事務所南側や木造倉庫北側にも石燈籠の部材が複数置かれているが、いずれも詳細不明である。

B7 不明燈籠 2 (所在不明) (図版 6)

不明燈籠 2 は茶席整備時に設置されていたが、現在同位置に確認できないものである。

森川によれば、四方燈籠という名で竿は新しくなっているが江戸時代初期のものとされ、「名古屋城内茶席乃由来」内の写真(図版 7)で見ることができるが、その後の経過については不明である。

4 その他の石造物

C1 方角石 (図 6-1)

この石造物は方角石(方位石ともいう)と思われるもので、「名古屋城内茶席乃由来」では解説がなく、名称や寄贈の経緯は不明である。

花崗岩製で円柱状の形状をもち、直径 60cm、高さ 30cm である。上面には直径 30cm で深さ 15.5cm の穴が開けられ、手水鉢として使用できるようになっている。穴の周囲には十二支が篆書体で時計回りに陽刻されている。周囲の石も一体のものと考えられ、台石は幅 20cm 高さ 20cm ほどで方角石を囲うように置かれている。台石の北東部には半円状の削りこみがつくられ、現存しないがここに部材が組み合わさっていた可能性がある。

方角石は江戸時代後期から明治時代にかけて方角を確認する目的で各地につくられたもので、十二支とともに中央部に東西南北が彫られているものが多い。この資料は中央が削られてしまっているが、当初はここに方角などが示されていた可能性も考えられる。ちなみに、現在

は実際の方角から西方向に約 20° 傾いた状況で設置されているため、方角は正確ではない。

C2 紙屋川橋杭 (図版 7)

紙屋川橋杭は森川によれば京都鷹峯の紙屋川の古い橋杭で、もとの猿面茶席が二之丸にあった頃に橋杭の手水鉢を用いていたことから、それを模して設置されものである。

橋杭は花崗岩製で円柱状の形状をしており、直径 36cm で露出部の長さは 72cm であるが、下部は地中に埋められている。上面は手水鉢として使用するために直径 23cm、深さ 10cm ほど彫り込まれており、その外側には直径 30cm、幅 5mm で 1 本の円形の溝が彫られている。

由来については森川の解説に齟齬があり、不明である。解説を引用すると、「昭和 17 年徳川園内に「猿面茶席」の模造を故森川勘一郎が建築した際、京都から運送して使用した。しかし、太平洋戦争の空襲で席は惜しくも焼失したが」、橋杭は残ったために城内へ移して使用したとある。まず、徳川園内に建築した茶席とは現在熱田神宮内にある六友軒を指す可能性がある。六友軒は昭和 22 年(1947)に熱田神宮へ寄贈され命名は森川勘一郎とされるが(竣工年は不明)、今も現存しており戦禍を免れている。空襲によって焼失したのは鶴舞公園に移築されていた猿面茶席で、これらのことから資料の評価が難しくなっている。

C3 車手水鉢 (図 6-2、図版 3)

車手水鉢は森川によれば名古屋城築城の際に加藤清正が大石を運ぶ車輪に用いたと伝えられている石造物である。

全体の形状は直径 110cm 厚さ 39cm の円柱状となっている。上面には手水鉢として使用できるように 2 段で彫りこまれており、1 段目が長さ 31.5cm で幅 27cm、深さ 1.5cm、2 段目が 25.5cm で幅 24.5cm、深さ 20cm である。1 段目は浅いため、蓋受けとして機能していた可能性がある。

側面は北面が平滑になっている一方で、南

面は中心にある直径21cm、深さ11cmの穴に向かって最大径66cmのつき臼状（上部が直線状の楕円形）になっており、外周の両端には幅20cm程度で長さ16cm程度の匙状に彫りこむ装飾が9箇所確認できる。上面と下面はどちらも平滑に加工されており、対称的な形状をもつ点も注目できる。

装飾性に富んだ形状をしており、車輪として用いていたのか不明である。車輪でないとしても各部位がどのように機能していたのか想像できず、他に当てはまる石造物もおそらくないだろう。

この石造物を考えるにあたり、参考となるのが『金城温古録』第四十二冊に記されているスケッチである。この冊では二之丸御殿の御数寄屋を取り扱っており、ここに「車御手水鉢略図」が記されている。独特な形状をした手水鉢のスケッチとともに「惣卒に拝見記憶し来てこれを写す、甚大凡也。」と説明書きがあり、御クサリ（金偏に巢）の間細見図中には車手水鉢の位置が落とされている。記録されている情報はかなり限られているが、スケッチに描かれた形状は御深井丸茶席にあるものとよく似ている。スケッチ自体も記憶をもとに描いているため、細部の検証はできないが、全体の形状、上面の彫りこみ、側面中央の穴、側面外周の形状が類似する。このことから『金城温古録』のスケッチと同一形状のものと思われるが、実物なのか模造品なのかは不明である。

C4 くりぬき井筒（図版8）

くりぬき井筒は昭和24年（1949）の茶席整備に伴い、長谷川祐之より団原古墳石室とともに寄贈されたものである。

花崗岩製でひとつの石材を円形に削り抜き井戸筒としており、外径が87cmで幅11cm、内径が64cmである。下部は地中に埋まっているが、露出部の高さは54cmである。

水谷盛光が寄贈者の長谷川に聞き取り調査

をしており、その記録では滋賀県にあった鎌倉時代以前のものという。全国に3つしかないとも記録されているが、真偽は不明である。

加工技術を見ると、外面内面ともにナラシ技法で仕上げられており、精緻で丁寧な加工といえる。

C5 手水鉢1（図版4）

手水鉢1は又隠茶席の移築に伴い、もとあった稲沢市祖父江町の山内邸から配置を変えずに運ばれたとされるものである。

砂岩製で、長さ75cmで直交方向の幅75cmである。下部が地中に埋まるが露出部の高さは30cmで、上面は直径31cm深さ17cm彫りこまれている。その中心にはさらに直径5cmの小孔が見られる。

森川によれば、明治初期頃に両替町久田家の久田栄甫が山内邸で庭園を整備しており、その際につくられたものとされる。手水鉢が井筒の組石のひとつとなっている意匠は栄甫の好みだという。

C6 手水鉢2（所在不明）（図版6）

手水鉢2は四方燈籠2と同じく茶席整備時には設置されていたが、現在確認できない。

森川によれば、室町時代の逸品と評されるものである。京都西翁院の「澱看の席」を模した澱看茶席を整備するにあたって、澱看の席の手水鉢が袈裟型であったことからそれに合わせて蒐集した袈裟型手水鉢とされる。「名古屋城内茶席乃由来」内の写真（図版7）では見ることができるが、いつ頃に撤去されたのか不明である。

5 おわりに：茶席庭園の石造物について

ここまで茶席庭園の石造物を見てきたが、類例がなかなか見当たらないような珍しいものが多く、由来が不明なのが惜しい限りである。ただ、こうして1箇所を集められたおかげで石造物の博物館ともいえるような場となっている。

昭和24年(1949)につくられた御深井丸茶席は、戦禍によって建物の大半が失われた戦後の名古屋城において最初期の整備といえる。天守再建論争も起きるなか、整備費は名城再建後援会からの寄付金があてられた。背景には天守再建への機運醸成と茶どころ名古屋の復興があり、市内の多くの財界人や茶人の協力があった。また、戦前の名古屋の茶人たちは石造物への造詣が深く、国内外からさまざまな石造物を収集していた。ここに名古屋を代表する茶人森川勘一郎が音頭をとって整備を進めたことで、石造物の逸品が集結した。つまり、御深井丸茶席は戦後復興のなかで近代と現代の茶どころ名古屋を繋いだ象徴的な文化財と評価できるだろう。

この一方で石造物の現況をみると、心礎や石燈籠で風雨による損傷が進行しているものが確認できる。礎石については樹木の根によって原

位置から動いているものが見られる。今後適切に保存修理し、活用していく必要がある。

なお、本稿の執筆にあたっては、高野学様から河内飛鳥出土塔心礎について示唆に富んだ多くのご教示をいただきました。木村有作様には隅櫓礎石の調査にご協力いただいたほか、様々なお力添えをいただきました。また、西澤光希様と河本愛輝様には石造物の評価についてご助言いただきました。ここに記してお礼申し上げます。

註

- (1) 通常一般公開はしていないが、名古屋城総合事務所へ問い合わせれば、貸出施設としてお茶会や結婚式などで利用可能である(令和5年3月31日現在)。
- (2) 御深井丸の大天守礎石展示の北方に位置する団原古墳石室は島根県松江市団原で出土した石棺式石室である。御深井

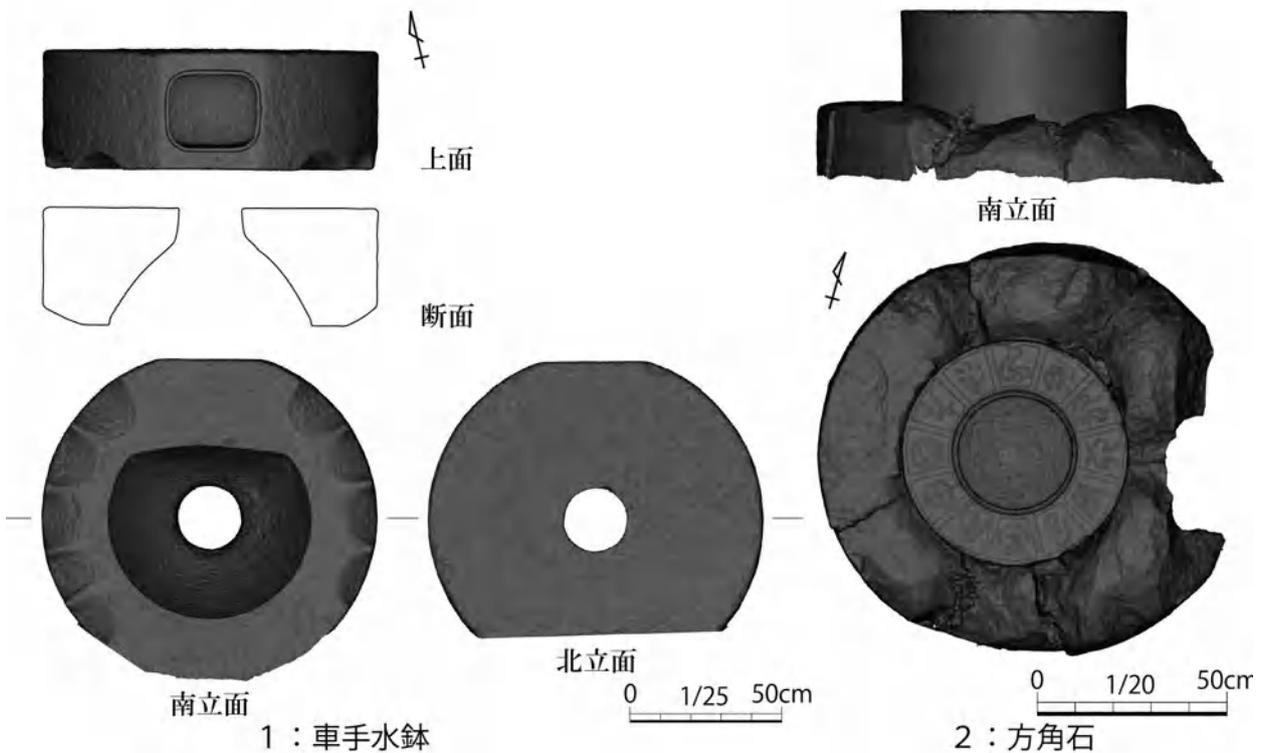


図6 その他の石造物実測図

- 丸茶席整備に伴い、昭和 24 年に長谷川祐之から寄贈された。
- (3) 1985 年に脱稿したものが 1989 年に掲載されているため、ここで取り上げた。
- (4) シンポジウム内で藤沢一夫が発言している「飛鳥寺」採集瓦は未確認のため不明である。
- (5) 玉林抄の記述自体が真偽不明ではあるが、推古天皇の御願があったとすれば、創建年代から大和の飛鳥寺の方が適合すると考えられる。
- (6) 3 次元計測はフォトグラメトリによって実施し、Agisoft Metashape Professional (ver.1.8.4) を使用した。
- (7) 本稿では和田晴吾による技法設定を用いている（和田 1991）。技法設定の検討及び定義付けについては拙稿も参照のこと（大村 2020）。
- (8) 古代の石工集団について、和田晴吾は寺院造営集団の大規模な組織体制内で協業する一員となっており、基本的には石切場に規定される集団像があったとしている（和田 1991）。
- (9) 本稿での石造物の名称について、B1・B3～B5 は「名古屋城内茶席乃由来」、C4 は聞き取り調査の記録に合わせた。森川は礎石なども手水鉢と呼称していたため、その他は執筆によるものである。
- (10) 茶席の整備は市内の茶人・財界人たちの尽力によって実現したもので、石造物は森川勘一郎らが市内各所に依頼・懇望して収集したと森川の解説にある。
- (11) 参考までに、名古屋城三の丸遺跡では古代瓦が出土しており、8 世紀後半に小規模寺院があった可能性が指摘されている（永井 2019）。ただし、古代瓦の出土分布は台地西縁に集中しており、礎石が出土したとされる旧清水御門の位置とは一致しない。
- (12) 石燈籠の形式・各部名称は『石燈籠新入門』（京田 1970）を参考とした。

《Title》

Stonework in the garden in Ofukemaru tea ceremony

《Keyword》

Ofukemaru, cornerstone of the tower, ancient temple, Yumiya scaffold, cornerstone, stone lantern, Oribe lantern, Kasuga lantern, Square stone, Well tube

- (13) 立像の右部でかすかに「四」のような刻銘が見られるが、今回は全体を判別することができなかった。

参考文献

- 石田茂作「塔の中心礎石に就いて」『考古学雑誌』第 22 巻第 2・3 号 1932
- 伊藤厚史「河内飛鳥寺塔心礎」『ホリデー考古』第 8 号 1989
- 岩井隆次『日本の木造塔跡—心礎集成とその分析—』雄山閣出版 1982
- 大村 陸「伊豆凝灰岩製家形石棺からみた古墳時代の石材加工技術」『筑波大学先史学・考古学研究』第 31 号 2020
- 大谷俊雄「近つ飛鳥廃寺（俗称西の寺）考」『郷土近つ飛鳥』第 40 号 羽曳野郷土研究会 1982
- 京田良志『石燈籠新入門』誠文堂新光社 1970
- 古代を考える会『古代を考える 7 玉手山遺跡の検討』1976
- 田中重久「塔婆心礎の研究」『考古學』第 10 巻第 6 号 1939
- 辻 学「河内飛鳥寺跡」「飛鳥第一散布地」『羽曳野市史』第 3 巻 史料編 1』羽曳野市 1994
- 永井邦仁「名古屋城三の丸遺跡の古代集落—熱田台地の古代集落と愛智郡・山田郡（1）—」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 20 号 2019
- 名古屋市教育委員会『名古屋の石造物』1983
- 名古屋城管理事務所『名古屋城内茶席乃由来』（発行年不明）
- 羽曳野市教育委員会『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概報』1986
- 羽曳野市教育委員会『野中寺—塔跡発掘調査報告—』1986
- 羽曳野市教育委員会『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』1992
- 山本 彰「河内御嶺山古墳と河内飛鳥寺」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』11 2007
- 和田晴吾「8 石工技術」『古墳時代の研究 5 生産と流通 II』雄山閣 1991



1 : 弓矢櫓礎石 (北西から)



2 : 東弓矢多門櫓礎石 (西から)



3 : 四方燈籠、石製車輪 (北から)



4 : 西ノ屋燈籠・手水鉢1 (北西から)



5 : 不明燈籠1 (西から)



6 : 不明燈籠2・手水鉢2 (北から)



7 : 紙屋川橋杭 (南東から)



8 : くりぬき井筒 (南から)